資　料

モデルとしての明恵

木　元　俊　宏
（財）日本児童家庭文化協会

イタリア・アッシジの聖フランチェスコ（ジョバンニ・フランチェスコ・ベルナルドネ，フランチェスコ修道会の創始者。1181／82－1226）の人生は，動物との交流などの説話に彩られている。米国では動物の守護聖人とみなされ，彼にちなむ祝日には，ニューヨークの教会で，地球上の生命を祝福するミサが行われたりしている（1989年10月２日付け「朝日新聞」東京本社版夕刊）。このような歴史的人物に関する知識の存在は，広い意味でのモデリングを促し，環境問題に取り組む有為の人々の育成に寄与しているものと思われる。

ここでは，聖フランチェスコと同様な人格モデルとして，日本にも明恵（みょうえ）上人という人物があることを，資料として紹介したい。

1.　その生涯

明恵は，平重国という武士の子として現在の和歌山県有田郡金屋町に生まれた。その生没年（1173－1232）は，フランチェスコと重なる。同時代人として，鴨長明，慈円，藤原定家，運慶，湛慶，法然，親鸞，栄西，道元らがいる。９歳で神護寺に入り，のちに栂尾（とがのお）の高山寺で，華厳宗と密教に立脚した教団を率いた。歴史的には，当時の新興仏教思想である「念仏」の考え方を批判し，奈良仏教としての伝統を持つ華厳宗を中興した人物とされる。個人史では，修行に専心するために自分の耳をそいだり，インドへの旅を企てるなどのエピソードがある。

2.　対動物観と奇跡

明恵の人となりを伝えるものとして，弟子の喜海が著した「高山寺明恵上人行状」の系列の史料と，同じく喜海が著したことになっているが内容的にみて成立年代はかなり後だとみられている「栂尾明恵上人伝記」（注，栂尾ではなく梅尾）の系列がある。誇張はあるがより流布した「伝記」の方が，一般の明恵像の形成に与って力があるとされる。「伝記」には，明恵の対動物観と，いくつかの奇跡の記述がみられる。

例えば明恵は，「蟻・蝨（けら）・犬・烏・田夫・野人」も，皆，仏性を備えた存在であるからいやしんではならないとして，犬が寝ているそばでも，馬・牛の前を通り過ぎる時でも，それなりの人に対面したように挨拶し，膝を屈めたりして通った，とされている。

奇跡は次のようなものである。すなわち，明恵が修行の最中に部下を呼び，「手水桶に虫が落ちたようだ。すぐに行って放してやれ」という。行ってみると，蜂が落ちて死にかけていたので，急いで取り上げて放してやった。また，坐禅の最中にやはり部下を呼び，「裏の竹やぶで，小鳥が何かに蹴られているようだ。行ってなんとかしてやれ」という。行ってみたら，雀が小鷹（ハヤブサやハイタカの類）に蹴られていたので，追いはらった。さらに，夜，眠るように座っていた明恵が，いきなり「雀の巣に蛇が入った」と騒ぎだし

たので，弟子たちが言われる所に明りを灯して行ったら，大蛇が雀の子を食うところであったので，急いで引き離した。

「田夫，野人」という表現には，現代の価値観からみて抵抗感がある。また，雀に関するエピソードは，食物連鎖へのお節介な介入であろう。そもそもこうした奇跡の説話は，現実の明恵と峻別して考えるべきである。だがこれらの説話には，倫理的に行動を起こすべき対象をヒトだけに限定しない，という自然と親和性をもった世界観の表明をみることができる。

3. 島との対話

自然との関係という視座から明恵を見るとき，もうひとつの話題として，彼と島との対話がある。島とは，明恵の故郷に近い，紀伊国湯浅（現在の和歌山県有田郡湯浅町）の沖にある，現実の島のことである。

明恵は，建久6年（1195）秋，神護寺を出て，湯浅の白上（しろかみ）という場所に小屋をたてて転居し，建久9年（1198）まで過ごした。ここは海に面した場所で，眼下に湯浅の湾内の島々を望むことができた。「行状」系のうち漢文で書かれたいわゆる「漢文行状」によると，明恵は建久年間の終わりごろ，喜海ら若手の弟子2人とともに，その島のひとつである苅磨（かるま。現在の名は苅藻）を訪れた。5日後に迎えに来るよう言い渡して船を帰し，島の南端の洞に板を数枚差しかけただけの仮の住居をつくり，食料は携帯した干した飯と水，酢であった。現在の視点でいえば，自然の中でのキャンプである。世間の騒がしさを離れ，漁師も船を寄せなかったとある。読経を続けた明恵は，ある時，沈みゆく太陽が海に輝き，わきおこった強風が波をたて，海面に映る陽光がさまざまな色を見せる様子に泣いた。「行状」の記述に従えば，その情景を華厳哲学の理論と重ね合わせ，「此時上人泣想像如来在世昔」（この時上人は如来が在世していた昔を思って泣いた）とあるのだが，自然情景を感動の引金として泣いたことには変わりがない。

後に明恵は，この苅磨島に，手紙を書く。使者に，島の中に置いて来るよう命じて渡したのである。これだけでもかなり突飛な行為に思えるが，その手紙の内容が「行状」「伝記」に紹介されている。内容は両者で若干異なるが，要点はまず華厳哲学に照らして島という存在がいかに完全なものであるかを論じた上で，「本当に面白い遊び友達とは，あなただと思っている」と述べるのである。また，桜の木（「行状」では，神護寺の桜で，明恵はこの木と語らい遊んだとある）に対して消息を尋ねる手紙を出したいが，そのようなことをすれば世間からなんと言われるかわからない。しかし，そのようなことを言う人は友人にしないことにしよう，と言うのである。

「漢文行状」によれば，明恵は建暦三年（1213）にも旅行の途中で苅磨島に立ち寄っている。この時明恵は経文を唱えるなどして，「海中魚鼈鯨鯢螺鱗等衆生」の解脱を願った。要するに，魚，カメ，雌雄のクジラ，巻貝，鱗のある生き物（通常は魚）が救われることを願ったのである。このリストは，今日の自然保護問題の焦点となっている動物と重ね合わせると興味深い。

4. 留意点

明恵は歌も詠み，「明恵上人歌集」が編まれているが，その中に次の歌がある。

「鶴の子の　すむ木いひては　人しらむ　育たむまでは　隠しおかばや」

ツルのひなの巣立ちを攪乱しないよう，巣の位置を秘しておこう，という内容である。これは，自然保護にかかわる人間の問題意識と重なる歌であるが，ただし，日本国内でみられるツル類は，通常は木に営巣しないはずである。このことは，歌が詠まれた当時から指摘されていたらしく，「歌集」には，ほかの鳥のことと読みかえてもいいではないか，という付記がある。いずれにせよ，明恵を自然に通暁したナチュラリストとして理解しては，些か問題がありそうである。

また，華厳哲学の理解にあたっては，それをむやみに生態系の理解と結び付けないストイックさが必要とされるかもしれない。

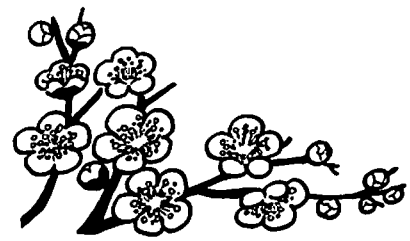
5.　参考文献

概要を述べ添える。

久保田　淳ほか校注（1981），明恵上人集，岩波書店．
「明恵上人歌集」，明恵が自分の見た夢を記録した「夢記」，「梅尾明恵上人伝記」などが収められている。文庫本なので入手しやすい。

平泉　洸　訳注（1980），明恵上人伝記，講談社．
「明恵上人集」所収の「伝記」と底本は同じで，現代語訳，語句説明などが付けられている。講談社学術文庫の中にある。

田中　久夫（1988），人物叢書　明恵，新装版，吉川弘文館．
奥田　勲（1978），明恵　夢と遍歴，東京大学出版会．
いずれも，明恵の事績を紹介している。後者には，刈磨島への旅についての「漢文行状」の比較的詳しい引用がある。

高山寺典籍文書綜合調査團編（1971），明恵上人資料第一，東京大学出版会．
「漢文行状」「仮名行状」のほか「伝記」系の史料が収める。なおこのシリーズは第三まで発刊されている。

河合　隼雄（1987），明恵　夢を生きる，京都松柏社．
「夢記」についての考察が主眼だが，華厳哲学についても紹介されている。